

— 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

西欧の文化史を紐解くと、まるごと本になってしまった人物の伝説・記録にことかかない。そうした記憶の達人伝の宝庫ともいうべきなのが、古代ローマ帝国時代に著された大プリニウス『博物誌』（七十七七年）だ。自軍の全兵士の名前を言えたキュロス王や、全ローマ人の名を知っていたルキウス・スキピオらと並んで、図書館の蔵書をまるごと暗記してしまったギリシア人カルマダスなる人物が紹介されている。本好きなら憧れてしまう逸話だ。

少し時代が下った聖アウグスティヌス（三五四―四三〇年）の著作『魂の本性と起源について』には、さらに興味深いエピソードが紹介されている。なんでも学友のシンプリキウスなる人物は、ウエルギリウスの全作品を丸ごと憶えていて、指定したどの行も自在に暗唱し、リバース再生さえできたという。またキケローの傑作演説もすっかり暗記していて、いかなるトピックについて名句が欲しいときにも、たちどころに大弁論家ばりの名文を紡ぎだしてくれたそうだ。

たしかにすごい。だが、アウグスティヌスがここで感心しているのは、単なる暗記量の多さではないことに注意しよう。むしろ内面にストックした素材を自在に料理し、アレンジできる能力にこそ賞賛の念を示しているのだ。丸暗記ではなく、再利用可能なかたちでの記憶——ここに、記憶と創意を結びつけるヒントがある。

そのアウグスティヌス自身もまた、『詩篇』を中心に聖書の内容を徹底的に読み込んで己の血肉と化し、ほぼ聖句の引用のみで著作の大部分を書き上げたと言われる。そして彼の著作群を聖典として徹底的に咀嚼した後世の神学者たちが、今度は「アウグスティヌスの言葉」で本を綴ることになる。

似たような現象は、ルネサンス人文主義の父とされる文学者ペトラルカ（一三〇四―一七四年）にも見られる。彼はキケローやウエルギリウスらの古典文学に心酔して味読・精読を極めた結果、自分の書くものが、古代人の言葉の引用なのか自己のオリジナルの発想なのか、区別がつかなくなってしまうたと表白している。これぞまさに能動的読書の極み。本を喰らい、吸収同化し、著者と一体化してしまうわけだ。逆に言うと、この境地に達しないかぎり、記憶は創意とは容易に結びつかない。

この点に關して、再び聖アウグスティヌスの示唆に富んだ言葉を聞こう。彼によれば、「考える」とは、精神内面のあちこちに散らばっている記憶の断片の中から、関連するものを「思惟によつて寄せ集め」、新しいコンテキストのもとに按配することだという。まさに記憶に依拠した知的活動だ。そしてその基盤となる記憶データが、将来の再利用を想定したシステムに従つて構築されたものであるとき、つまり記憶術に基づくとき、爆発的な創意が可能となるのだ。

本のコンテンツの咀嚼、血肉化という営みと緊密に結びつくルネサンス期の読書習慣がある。コモンプレイス・ブックの活用だ。あえて極端に単純化するなら、これこそ知のショートカット、いわゆるファスト教養のはしり、とでもいふべき事象だ。この特殊な習慣の実体とその背景を知るために、近代初頭の印刷術がもたらしたメディア革命の衝撃を、以下にざつとおさらいしておこう。

一五世紀中葉にグーテンベルクが活版印刷術を実用化すると、たちどころにヨーロッパ各地に印刷工房が出現し、書物を大量に刷りはじめた。いや刷りまくつたという表現がより適切であろうか。それまで手書きによる一品生産であつた本が、一挙に、大量生産・消費する商品となつたのだ。

他方で、印刷術の拡散と並行して、西欧社会は新奇な情報の洪水にみまわれた。新大陸の発見による未聞の文物の大量流入、コペルニクスの地動説に代表される自然科学の急速な発展、激化する宗教改革や政治紛争、ルネサンス芸術の華々しい展開、都市経済の目を見張るべき発展——印刷メディアはこれらの領野で日々生み出される膨大な情報や知見を、高速かつ広範に拡散するうえで大きな役割を果たした。

けれども意外なことに、一五世紀後半から一六世紀にかけてもつとも多く刷られた本のジャンルは、古典古代の文芸・歴史・哲学のテキストであつた。古代ギリシア・ローマ人たちが執筆した「誰もが知る(べき)」著作であれば、売れることが確実に予測できたからだ。それらの本は商品が市場に溢れかえると、学校教育の現場も教科書として積極的に採用し、相乗効果ははかられた。

するとどうなるか——そう、教養人を自負するなら当然読んでおくべき古代の名著群が、印刷本のかたちで大量に流布するこ

とになったのだ。もともと本が好きで勉強が苦にならない人なら、別に問題はない。けれども多忙な人や読書嫌いには一大事だ。そこで登場したのが、古典の膨大な海原のなかから重要なポイント（典型的なトピック）を要約抜粋し、一冊にまとめた書物、いわゆる**コモンプレイス・ブック**であった。

たとえばその種の刊本の傑作、I・R・テキストル『オフィキーナ（工房／仕事場）』（初版一五二〇年）は、当時の標準的な図書館がそなえるべき古今の名著を主題やテーマ毎に切り刻んで解体し、再利用可能な断片として再編集したものであった。まさに携帯図書館ともいえるべきツールだ。

これには前史があった。コモンプレイスとは要するに「常套主題・定型フレーズ」のことで、ルネサンス期の読書子たちは、本を読み進める中で繰り返し出会う主題／お決まりの表現／格言・寸句等について、別に用意したノートに手書きで抜粋することで、情報を整理し、文体や修辞を学び、記憶に印象付け、己の血肉と化していた。こうした能動的な読書が当初は推奨されていたのだが、やがて、面倒くさいから出来合いの抜粋集が欲しい、という声が高まってゆく。こうして、どこかの誰かが作ってくれた高品質のコモンプレイス抜粋ノートが、印刷製本されて市場に登場することになる。

動作・感情・道徳倫理・人間関係・自然現象・軍事・神話・宇宙誌……などなど、とにかく考え得るあらゆる主題に関連するトピックが立項され、細分化され、それらに合致する古典や同時代の文献からの引用抜粋もしくはパラフレーズがぎっしりつまつたレファレンス本、それがコモンプレイス・ブックであった。本来、日々の読書を通じて何年もかけて作り上げるべき抜粋ノートが、出来合いの印刷本として安価で購入可能となったわけである。

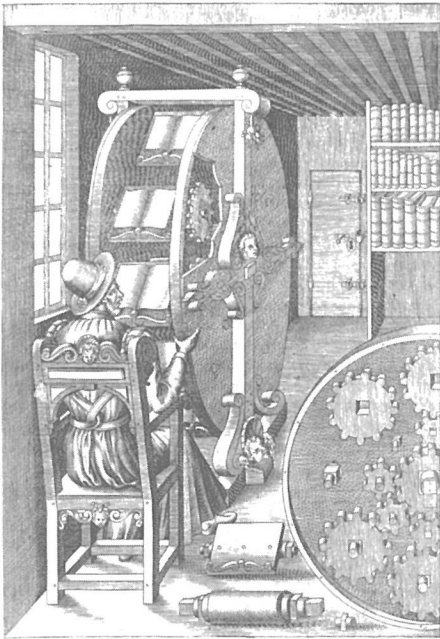
これが大いに受けた。いくつも類書が出版されてたちまちベストセラーとなった。人気の理由は、古典を手にとったことのないのに、読んだふりができるからだ。手紙をしたためる折、あるいは原稿を執筆する際に、この種のリソースをばらばらめくれば、教養の薰り高き引用をたっぷりとまぶし、あるいは時事ネタへのコメントとして歴史上の類似エピソードをいくらでも引いて、学識人ぶることができたのだ。これをファスト教養と呼ばずしてなんと呼ぼうか。

コモンプレイス・ブックは、記憶と読書を結ぶ伝統的な絆を、断ち切るきっかけともなりえた。携帯図書館が手元にあるなら、

なにも苦勞して自分の頭で数千冊の本を憶える必要はない。代わりに、その図書館の本のどこにお目当ての情報が見つかるのかを素早く検索できればいい。実際、コモンプレイス・ブックは後の版になるほど、インデックスが充実するようになる。こうしてみると同ジャンルは、ルネサンス期の文章制作の現場に必須の、高性能検索エンジンであったといえる。

ではこの種のレファレンス本が、やがて現代のウェブの検索エンジンに直線的に発展していったのかというと、ことはそれほど単純ではない。一見すると受け身の情報摂取を促すだけのようでありながら、使い方によっては大変クリエイティブなツールにもなったからだ。

そもそもコモンプレイス・ブックを編纂するには、膨大な書籍の素材が必要である。そうしてできあがった引用・抜粋・要覧のモザイクのような書物を、ざっとブラウジングすること自体が、「インターテクスチュアル・リーディング」の一つのモデルを提供したのだ。それはそうであろう。あるテーマについて、古今の著述家たちがどんなことを述べ、いかに思考を展開しているのが、瞬時にして把握・分析できるのであるから。



図

ろう。たとえば、「友情」と「裏切り」のような対比的トピックが見開きページに並び、古今の博学な引用・名句で埋め尽くされている——アリストテレスの見解は？ なるほど、では聖アウグステイヌスは？ じゃあ、この私の考えは？——たちまち脳みそが沸騰すること間違いはない。

ちなみにこれと同じことを、物理的な本を相手に行おうとするとどうなるか。図を見ていただきたい。拷問器具ではない、念のため。これはイタリアの独創的エンジニア、アゴステイノー・ラメツリ

(二五三二—一六一〇年)が提案した回転書見台の図である。着座した人の前に大きな車輪があり、これを輪転させることで十数冊の本を同時に閲覧できる仕組みだ。一つのトピックについて、関連する記述を相互参照できるハイパーリンク的装置ではあるものの、いかんせん、手間がかかりすぎる。それを一冊の本の頁上だけでやってのけるコモンプレイス・ブックの便利さがわかるだろう。

けれども記憶術もまた、複数の書籍や資料にまたがって、トピック毎に記憶イメージを分類収蔵することができた。

たとえばルネサンス時代の代表的な記憶術師ピエトロ・ダ・ラヴェンナ(一四四八—一五〇八年)は自著『フェニックス』の中で、一九のアルファベットのもとに、膨大な情報をすつかり納め、自在に引用できたと自慢している。彼が記憶していたのは、法律関係の語句二万、オウイデウスの著作から一〇〇〇の抜粋、キケローから二〇〇、哲学者の言葉三〇〇、聖書の文言七〇〇〇、その他もろもろ……。アルファベットとテーマ区分(法律、文学、哲学、神学……)を駆使して、記憶が入念に構築されていたことが分かる。コモンプレイス・ブックとの類似は明らかだ。

ここでもうひとつ押さえておきたいのが、コモンプレイスの章句・格言のうち、とりわけ道徳や倫理に関するものは、それらを心に深く刻むことで教育効果があるとみなされていた点だ。これもある種の「本の血肉化」である。そして憶えやすいようにと、古典から採った名句の数々が、ルネサンス期の貴紳の装身具や家具・食器に刻まれたり、学校や図書室の壁面に彫り込まれたりした。まさにコモンプレイスの物質化ともいうべき現象だ。

一例として、『エッセー』で有名なフランスの人文主義者ミシェル・ド・モンテーニュ(一五三三—一五九二年)を挙げておこう。彼は自身の城館の塔屋に設けた書斎の梁に、ラテン語とギリシア語の五〇の銘を刻んでいた。いずれも心に響く格言・警句の数々だ。当代きつての知性がひとり思弁に沈潜する場合は、古典の名言が静かに語り掛けてくる、精神的音響の豊かな空間であった。それはまるで本のページに包まれたような居心地であったに違いない。

本の中に入る——この、本好きにとつて最高の夢をかなえてくれるのも、記憶術である。その際に要となるのが、保管データが常に位置情報とセットになっている、という点だ。

たとえば本を記憶術によって一冊まるごと憶えたなら、そのコンテンツは、空間的な広がりや秩序をもった精神内面において、一定の場所を占めることになる。内容を想起したり、別のデータと突き合わせたりする際は、記憶建築の中をヴァーチャルに歩きまわることになる。空間の移動が、そのまま思考の流れを表しているのだ。であるならば、この精神内の歩行を、外部空間とのパラレルで考えてみたくなる。

要するに、何か大量の情報や貯蔵・展示する場をつくる場合、そのスペースを陳列棚や仕切り壁で細かく分節し、そこに標本、書物、芸術品などを秩序だてて配置する。そうすることで、データが置かれた場所それ自体に、全体の分類秩序の中での意味が生じる。記憶術の素養がある人にとって、そこは、情報管理のしやすい空間となるはずだ。なぜなら、内面におけるデータ操作のノウハウを、そのまま外部に適用できてしまうからだ。するとどうなるか。脳内で処理すべき認識や思索のプロセスを、リアル世界の物質や空間に投影して掌握できるため、短期記憶の負担が劇的に減るのだ。そのぶん多くのエネルギーを、より複雑で深い思考の展開へと振り向けることができるだろう。

たとえばその種の施設としてすぐに思い浮かぶのは、図書館や文書館、クンスト・ウント・ザンダーカンマー美術・博物館蒐集室、解剖劇場、実験室や観測所などなど——いずれもルネサンスという情報革命の時代に発展した、知的活動のためのビルディング・タイプだ。

D そのような空間の例として、最後に庭園の世界を瞥見しておこう。なぜなら「庭園文学」なるテーマがあるほど、そもそも庭と書物の相性は良いからだ。

一六世紀西欧の庭園を特徴づける要素として、古代彫刻・遺物の展示がある。いわゆる文芸復興運動は、テキストや観念の世界だけで進行していたのではない。書物を介した古代文化の知識が増えてくると、つぎは、モノとしてのリアルな古代世界に触れたい！という要求が強まってくる。折しも都市ローマとその周辺では、一五世紀後半以降、古代遺跡の発掘や調査が相次ぎ、たちまち彫刻、碑文、石棺、建築断片、メダル・古銭のコレクション・ブームが出来する。かさばるものが多いから、数が増えれば室内では手狭になり、中庭やロτζアへ、そして外部の庭園へと、蒐集空間は広がっていった。こうして一六世紀になると、とりわけイタリアでは、古代彫刻や遺跡の破片を自慢げにディスプレイした庭が、あちこちで見られるようになる。

そもそも古代遺物には、ラテン語やギリシア語の銘文やエピグラムが刻まれたものが多く、古代から直接届いたそれらの深遠なメッセージを読み解く楽しみがあった。また、神話・歴史上の人物や出来事をあらわした彫刻や浮彫り図像などは、解釈の手がかりとなる古典文献と密接に結びついていた。要するに、これらのオブジェを大量に内包した庭という空間は、きわめて文学的／文献学的な磁場を帯びていたのだ。

コレクターたちも、それぞれが古典文学や古代史に のある人文主義者である。自慢の彫刻や碑文をひとつの単語、ないしは意味単位とし、それらを複数組み合わせ、時には修復・加工や意味の読み替えをしながら、花壇や噴水の合間に配置してゆく。順序を入れ替えれば、無数の物語が紡ぎ出されるだろう。それはいつてみれば、古典の純正チームにアレンジを加えながら、新たな空間テキストを綴ってゆく営みに他ならない。またそのような古代風庭園を散策することは、あたかも書物のコンテンツを五感で涉猟し、全身で読書をするような感覚に等しかったのではないか。

（桑木野幸司「ルネサンス時代の創造的読書と記憶術」）

設問

(一) 空欄 に入る語句として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 下馬評
- 2 音沙汰
- 3 新機軸
- 4 一家言
- 5 金字塔

(二) 傍線—— A 「近代初頭の印刷術がもたらしたメディア革命の衝撃」に関する説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 未聞の文物や新説、目を見張る急速な発展に関する知見が、売れることが確実に予測できる商品として書物の形で大量に印刷され、教養人なら得ておくべき情報となった。

2 古典古代のテキストが、活版印刷術の実用化によって一挙に大量生産され、一品生産であった時よりも安価に大量消費される商品となったため、価値が認められなくなった。

3 新大陸の発見、自然科学の急速な発展など、人々になじみのない領野の新奇な情報や知見が印刷物として西欧社会に溢れかえり、新しい情報を要約整理する書物が必要とされるようになった。

4 新しい印刷術によって大量に刷られるテキストは、売れることを見越した商品であることが優先され、学校教育現場において有益な効果をあげるかどうかは重視されなくなった。

5 古典古代の文芸・歴史・哲学のテキストが、印刷術の拡散によって教養を誇るためには当然読んでおくべき古代の名著群として一挙に市場に溢れ、大量に消費される商品となった。

(三) 傍線——B「コモンプレイス・ブック」に関する説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 古典から抜粋された常套主題や定型フレーズを手軽に学ぶことができたが、出来合いの印刷本によって一律的に学ぶという、人々の受け身の情報摂取の在り方が問題視されるようになった。

2 教養人なら知っておくべき情報を素早く入手することができ、古典を手にとることのなかった人々でも学識人ぶったふるまいができるという手軽さが受け入れられた。

3 格言・寸句等の引用によって重要なポイントを知ることができたため、引用元の名著を理解するための手掛かりとなるという利便性が、名著群に触れたこともなかった人々の人気を呼んだ。

4 インデックスが工夫され充実したことで、名著を網羅的に記憶することが可能となり、知や教養を身につけて学識人になりたいと考えた人々に大いに歓迎された。

5 何年もかけて学ぶべき文体や修辞、時事ネタへの見解がすぐに得られるようになったことで、学識とは古典の名著から得るものではないというように人々の認識が変化した。

(四) 傍線——C「使い方によっては大変クリエイティブなツールにもなった」の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 あるテーマのもとに集められた、古今の著述家の文章の一部を読み、それらを相互参照することを通して、新しいアイデアを得ることを読者に促すツールにもなった。

2 充実したインデックスをブラウジングし、考えるべきテーマが多様にあるという気づきを与えることによって、読者の思考の幅を広げるツールにもなった。

3 現代にも通じる多様なトピックについて、古代の著述家たちも考えていたことを知り、引用元となった書物を読者が学ぶことで、独自の発見をもたらすツールにもなった。

4 項目毎の引用・抜粋という厳選した知識の情報摂取を促すとともに項目相互の関係性の把握を求め、読者の分析力を養うことで、ひらめきをもたらすツールにもなった。

5 常套主題・定型フレーズが示している因習的な格言や警句を受容するのではなく、それらを批判的に再考することで、道徳や倫理の刷新へと読者を導く教育効果を持つツールにもなった。

(五) 傍線——Dについて、「庭園の世界」の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 一六世紀の西欧の庭園には、古代遺跡からの発掘品やモニュメントが、関連する古典神話の物語の順を追って配置されていた。こうした庭園は、散策者に古典神話の知識の有無を問いながら、五感を通して古典的な教養を育成する、知的活動を生み出す空間である。

2 一六世紀の西欧の庭園には、古典文献を読み解く体験ができるように、銘文が刻まれた古代遺物や関連するオブジェの蒐集品が展示されていた。こうした庭園は、コレクターが散策者たちに知識を顯示しようという、知的学習の成果を披露するために編まれた空間である。

3 一六世紀の西欧の庭園には、銘文の刻まれた古代遺物や、古典文献を想起させる神話・歴史上の出来事のオブジェなどが展示されていた。こうした庭園は、歩きながら展示品を読み解き、相互に関連づけることによって新たな物語を紡ぎ出していく、知的活動をもたらす空間である。

4 一六世紀の西欧の庭園には、ディスプレイされた古代遺物に刻まれた銘文やオブジェに関連する書物を収めた図書室や文書館が併設されていた。こうした庭園は、モノと観念という別の領域において進行していた文芸復興運動に働きかけ、組み合わせて理解することを促した知的活動のための空間である。

5 一六世紀の西欧の庭園には、テキストや観念の世界だけで進行していた文芸復興運動を、リアルなモノの領域まで広げるために古代彫刻や遺物が展示されていた。こうした庭園は、書物というコンテンツからは得ることができなかった五感を通じた古典文化理解を促し、運動の活発化を可能にした知的活動のための空間である。

(六) 次の i ~ iii について、本文の内容に合致するものには 1 を、合致しないものには 2 を、それぞれ記せ。

i アウグスティヌスは、ほぼ聖書からの聖句の引用のみで著作の大部分を書き上げたと言われている。オリジナルな発想を認めることができない著作を、後世の神学者たちはアウグスティヌスの言葉と認めず、聖書の言葉としてアレンジして再利用した。

ii 図書館の蔵書を丸ごと暗記してしまったギリシア人カルマダスや、ウエルギリウスの全作品を丸ごと憶えてしまったシンプリキウスは、何よりも、その暗記量の多さで人々を感心させ、憧れを集めた人物であると紹介されている。

iii 筆者は、脳内で処理すべき認識や思索のプロセスを、リアル世界の物質や空間に投影して掌握できる施設として実験室や観測所などをあげる。そのうえで、それらの知的活動のための施設は、短期記憶の負担を軽減し、より複雑で深い思考の展開を可能にするものとして評価している。

(七) 筆者は「創意」に結びつく「記憶術」をどのようなものと考えているか、説明せよ(四十字以内、句読点を含む)。

(以上・九十点)

二 次の文章は、左馬頭が自分の恋愛経験について友人たちに語った話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、かい弾く爪音、手つき口つき、みなたどしからず見聞きわたりはべりき。見るめも事もなくはべりしかば、このさがな者をうちとけたる方にて、時々隠るへ見はべりしほどはこよなく心とまりはべりき。この人亡せてのち、いかがはせむ、あはれながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしばまかり馴るるにはすこしまばゆく、えんに好ましきことは目につかぬところあるに、うち頼むべくは見えず、かれがれにのみ見せはべるほどに、忍びて心かはせる人ぞありけらし。

神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内裏よりまかではべるに、ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば、大納言の家にかかりとまらむとするに、この人言ふやう、こよひ人待つらむ宿なむ、あやししく心苦しきとて、この女の家はた避きぬ道なりければ、荒れたる崩れより池の水かげ見えて、月だに宿る住みかを過ぎむもさすがにておりはべりぬかし。もとよさら心をかはせるにやありけむ、この男いたくすずるきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけてとばかり月を見る。菊いとおもしろくうつろひわたりて、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれとげに見えたり。ふところなりける笛とり出でて吹き鳴らし、影もよしなど、つづしりうたふほどに、よく鳴る和琴を調べとのへたりける、うるはしくかきあはせたりしほど、けしうはあらずかし。律の調べは、女のものやはらかにかき鳴らして、簾の内より聞こえたるも、いまめきたる物の声なれば、清く澄める月にをりつきなからず。男、いたくめでて、簾のもとに歩み来て、庭の紅葉こそ踏み分けたる跡もなけれなど、ねたます。菊を折りて、

琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける
わろかめりなど言ひて、いま一声、聞きはやすべき人のある時、手な残いたまひそなど、いたくあざれかかれば、女、いたう声つくりひて、

木枯らしに吹きあはすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき

となまめきかはすに、憎くなるをも知らで、また箏の琴を盤渉調に調べて、いまめかしくかい弾きたる爪音、かどなきにはあら

ねど、まばゆき心地なむしはべりし。ただ時々うち語らふ宮仕へ人などの、あくまでざればみすきたるは、さても見る限りはをかしくもありぬべし、時々にも、さる所にて、忘れぬよすがと思ひたまへむには、頼もしげなく、さし過ぐいたり心おかれ、その夜のことにつけてこそまかり絶えにしか。

〔源氏物語〕

注 このさがな者 左馬頭の昔の恋人の一人。「この人亡せてのち」の「この人」も同じ女性。

設問

(一) 傍線—— a・b の意味として最も適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a	b
けしう	まばゆき
1 自然で	1 尊い
2 不誠実で	2 誇らしい
3 優れて	3 つまらない
4 劣って	4 うらやましい
5 いつも通りで	5 見ていられない

(二) 傍線——ア「もとよりさる心をはせるにやありけむ、この男いたくすすろきて」の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 もともとその女性と会うつもりだったのであるか、この大納言はかなり気を遣って
- 2 以前からその女性と相思相愛であったのであるか、この殿上人はともそわそわして
- 3 以前から今夜の訪問を予定していたのであるか、この大納言はたいそうきうきとして
- 4 前もって大納言に面会を申し込んでおいたのであるか、この殿上人は入念に準備して

5 もともとその女性に別れ話をするつもりだったのであるうか、この殿上人はとても慎重に振る舞って

(三) 傍線——イ「庭の紅葉こそ踏み分けたる跡もなければなど、ねたます」の説明として最も適当なものを、次のうちから一

つ選び、その番号を記せ。

1 大納言は女性に対して、自分より後に来た人を庭で待たせず部屋に招き入れていると、嫉妬している。

2 殿上人は女性に対して、庭の手入れをしてくれる人もいないようだと、恥をかかせている。

3 殿上人は女性に対して、ほかの男性が庭を通って訪ねてきたようにも見えないと、戯れて悔しがらせている。

4 殿上人は女性に対して、紅葉がすっかり踏み荒らされたように二人の仲も終わったと、悲しませている。

5 大納言は女性に対して、奥山と違い庭の紅葉は近寄って見られるのにあなたの心は見えなくなつたと、皮肉つている。

(四) 傍線——ウ「木枯らしに吹きあはすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき」の説明として不適当なものを、次の

うちから一つ選び、その番号を記せ。

1 「こと」に「琴」と「言」を掛けている。

2 「ひき」に琴を「弾き」と相手を「引き」留めるを掛けている。

3 自分が演奏する琴の音色を謙遜して、「木枯らし」にたとえている。

4 相手を引き留められるほど上手に琴を弾けないと、へりくだっている。

5 出し惜しみせずに和歌を詠んでほしいと、殿上人に言われて詠まれた和歌である。

(五) 傍線——「をりつきなからず」の文法的説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 名詞「をりつき」＋形容詞「なし」の未然形＋打消の助動詞「ず」の終止形

2 名詞「をり」＋形容詞「つきなし」の未然形＋打消の助動詞「ず」の終止形

3 ラ変動詞「をり」の連用形＋形容詞「つきなし」の未然形＋打消の助動詞「ず」の終止形

4 ラ変動詞「をり」の連用形＋四段動詞「つく」の連用形＋形容詞「なし」の未然形＋打消の助動詞「ず」の終止形

5 四段動詞「をる」の連用形＋四段動詞「つく」の連用形＋形容詞「なし」の未然形＋打消の助動詞「ず」の終止形
(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

- 1 ある殿上人は左馬頭と同じ車に乗り、一緒に内裏から退出した。
- 2 左馬頭は月を見ながら「琴の音も」の和歌を詠んだ。
- 3 左馬頭が亡くなった女性の家を訪れると荒れはてていて、池に月が映っていた。
- 4 ある殿上人が室外で笛を吹くと、室内にいる女性は和琴を弾いて合奏した。
- 5 左馬頭は宮中に仕える女性に対して、風情のある対応をするように心がけていた。
- 6 左馬頭は二人の女性と同時に交際していることを、その二人に隠していなかった。

(七) 傍線——について、左馬頭はなぜ「まかり絶え」たのか、その理由を説明せよ(三十字以内、句読点を含む)。

(以上・六十点)